

實  
驗  
日  
本  
修  
身  
書  
卷  
六  
高  
等  
小  
學  
生  
徒  
用

T1A3

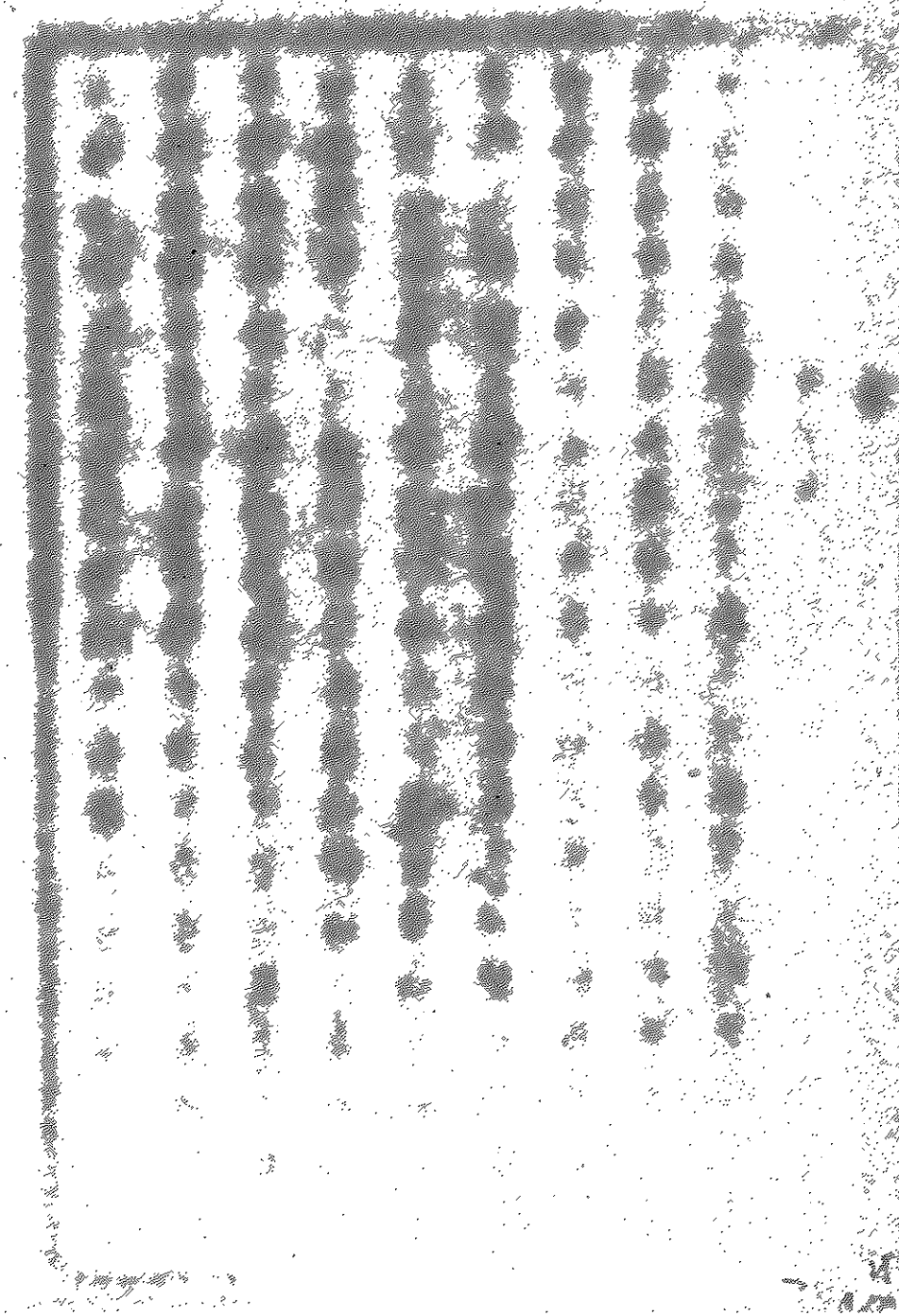
22

(W46)

明治廿七年一月十六日  
文部省檢定濟

三宅米吉校閱  
中根淑  
渡邊政吉編纂  
實日本修身書卷六  
高等小學  
生徒用

東京 金港堂書籍會社





第一課 孝行

父母の恩は、山よりも高く、海よりも深ければ、寸時たりとも、其の恩を忘れては、かなふまじきことなり。されど子たるもの、常に父母の膝下にありて、其の慈しみを蒙る時は、之に狎れて、深く其の鴻恩を感せず、或は父母の膝下を離れ、或は父母の失せたる後に至りて、始めて其の恵みの鴻大なるを悟り、追慕の情を起し、後悔の念を發するもの多し。

かくては、いかに心を苦しめ、思ひを焦すとも、其

のかひなかるべければ、幼き時より、常に父母を慕ひて、よく仕へまゐらせ、後に至りても、悔い怨むことなからんやうに願ふべし。小澤蘆庵の歌に、子を思ふ道にまゐひて今ぞ知る、

ちちふの山のふかき恵みを。

とありて、早くより孝行を竭くすべきことを警められたり。

澤橋六大夫は、宇喜多秀家の子秀規の乳母の子なり、關原の亂平ぎて後、秀家秀規八丈嶋に流されければ、乳母六大夫が僅に三歳なるを、秀家の

夫人前田氏に托し、主に従ひて、八丈嶋に赴きたり。後六大夫成長して、前田利長に仕へけるが、母を慕ひて已むこと能はず、遂に逃れて僧となり、常に渡嶋の手たてを求め居たり。或る日、將軍徳川秀忠の行列を犯して、願書を上りしかば、秀忠捕へて、之を獄に下したり。されど其の志しをあはれみ、渡嶋の事は許さざるも、其の望みをかなへ、前田氏をして、毎歳金穀器財を嶋に送らしめければ、主従不自由なく、世を送りたり。後其の身も赦されて、再び前田氏に仕へたりとぞ。

## 第二課 孝行

日月流るるが如し、親に事ふること、久しからんを欲すとも得べからず。故に子たるものは、常に心を盡くして、親の爲めに勤め、寸時も怠ることあるべからず。

昔江戸の湯嶋に住める紙屑買ひの子に、三郎兵衛といふものあり、九歳の時、人買ひに欺かれて、陸奥に連れ行かれけるが、途上紙切れの落ち散りたるを見る毎に、必ず拾ひ上げて、懷に入れ、少しも懈ることなし。人買ひ怪しみて、其の仔細を



問ひたるに、吾が父は、紙屑を買ふをもて、生業とするものなれば、之を贈りて、聊其の心を悦ばせんと思ひてなり」と答へたり。又食事を爲すにも、寢處に入るにも、必ず父母の方に向ひて禮するなど、孝行の志しあはれなりしかば、數日の後、人買ひも之に感づて、前非を悔い、俄に引きかへして、三郎兵衛をば、其の家に送り届けたり。後三郎兵衛家にありて、益す益す孝行を勵みければ、官に聞けて、賞銀を賜はりたり。

子ノ親ニ事フルハ、心ヲ盡スノミ。

### 第三課 兄弟

兄弟相愛するは、是人の天より受け得たる自然の情なり、されば兄は、弟を愛すること子の如く、弟は、兄を思ふこと父の如く、互に其の道を盡くして、終始渝ることあるべからず。

かかれれば、兄弟の情、愈濃になりて、父母の外には、兄弟ばかりよに頼しきものなきを知るに至るべし。然るに其の道を履まずして、相惡み相謗るが如きことあれば、兄弟は、ありてかひなきものとなるべし。故に互に心を廣くもちて、惡み謗る

ことなく、常に天より受け得たる親しみを全くせんことを務むべし。永保年中、源義家陸奥にありて、清原武衡及び家衡等と合戦せり、此の時弟義光は、京都に宿衛して居けるが、兄の軍あやふしと聞きて、援ひに赴かんことを朝廷に請ひ



しかぞ、許されざりしかば、官を辭して、彼の國に下向してけり。やがて行き着きて、義家に逢ひければ、義家大いに悦び、涙を流していひけるやう、「今日汝を見るは、故入道殿を見奉る心地なり、今より汝と力を合はせて、賊を討たば、勝らんこと必定なり」とて、共に出でて金澤の柵を攻め、終に武衡等を打ち滅したり、

兄弟ノ間ハ終始渝ラズ相互ニ愛敬ヲ盡クスベシ。



第四課 女徳

女は、和順なるを第一の徳とす、されば、一たび人に嫁して後は、一しは身を慎みて、舅姑夫の心に順ひ、朝夕の務めを怠るべからず。若し和順ならずして、驕り高ぶり、朝夕の務めを怠ることあらば、夫に疎まれ、舅姑に悪まれて、身の置きどころを失ふに至るべし。

婦人は、夫の家を以て家とすべきものなれば、一たび嫁しては、再び父母の家に歸るべからず、たとひ如何なる艱難に遇ひ、如何なる不幸に罹る

とも、よく辛苦に耐へて、婦人の本分を盡くさんことを務むべし。

酒井貞は、幼き時より心敏く、稍長トて讀書を好み、和歌を嗜めり。年十九にして、澤草庵に嫁せしが、姑夫に事へて孝順にして、僕婢を使ふになさけをかけ、家事も亦よく治れり。後草庵故ありて、職を罷められ、家俄に困窮になりしかば、貞是より備に艱難を嘗め、家を治めて、少しも倦むことなく、たまたま心に感ずることあれば、歌を詠みて其の心を慰めたりとぞ。

第五課 朋友

朋友に交るには、終始變らず、信義を守るべし、彼富貴なれば、之と結び、貧賤なれば、之と絶つは、小人の行ひなり。彼の盛衰を見て、合離を決し、身の利害を慮りて、去就を定むるは、誠に鄙しむべきことなり。

細井平洲、名は徳民、通稱を甚三郎といふ、初め其の國尾張にありける時、友人小河某、由ありて妻子を連れて、平洲が家に寄寓したり。其の後平洲江戸に移りしも、小河は猶其の家にあり、然るに

間もなく、飛鳥某といふ友人、亦同トく妻子と共に寄寓し、四年の間、三家族一つ家に住まひて、いと睦まつく暮したり。其のさま、恰も親子兄弟の如くに見えければ、近隣のものも、初めの程は、しか思ひて、或る日平洲の父に向ひ、君は、三子三婦共に孝友にて、誠に幸福の事なり、といひしものありしとぞ。

其の後、小河飛鳥の二人、何れも別居せしが、二人失せて後も、平洲は、猶其の遺族を、吾が家族のやうに思ひて、懇に扶助せしといふ。



第六課 朋友

朋友には、患難相恤むの務めあり、徒らに花を觀、月を賞するの樂しみを共にするを以て足れりとすべからず。變に臨みては、其の身の利害を打ち忘れて、其の患難を救ひ、其の不幸を憐むべし、是交りを厚くし、信を全くする道なり。

常陸の國の農夫市郎右衛門の子に、市兵衛熊吉といふ兄弟のものありけり。或る日、熊吉、友人午吉を伴ひ、山に往きて、薪を取り居たるに、いづこより來りけん、一疋の狼、午吉に飛びかかりたり。

熊吉は之を見て、大いに驚き、急ぎ馳せゆきて、兄市兵衛を呼びて來れり、此の時午吉は、もはや噛み伏せられて居ければ、市兵衛は、直ちに狼に組みつき、て、やうやうに引き離し、且熊吉に命トて、鉋を取り寄せ、頻りに狼を打ち、つひに殺したり。此の事やがて領主に聞ければ、褒美として、金若干を兄弟に賜はりたり。人の友たらんものは、誰も皆市兵衛兄弟の如き心にてありたきものなり。

朋友ノ窮乏セル時ハ、之ヲ扶ケ、危難ニ陷ラントスル時ハ、之ヲ救フベシ。

第七課 恭儉

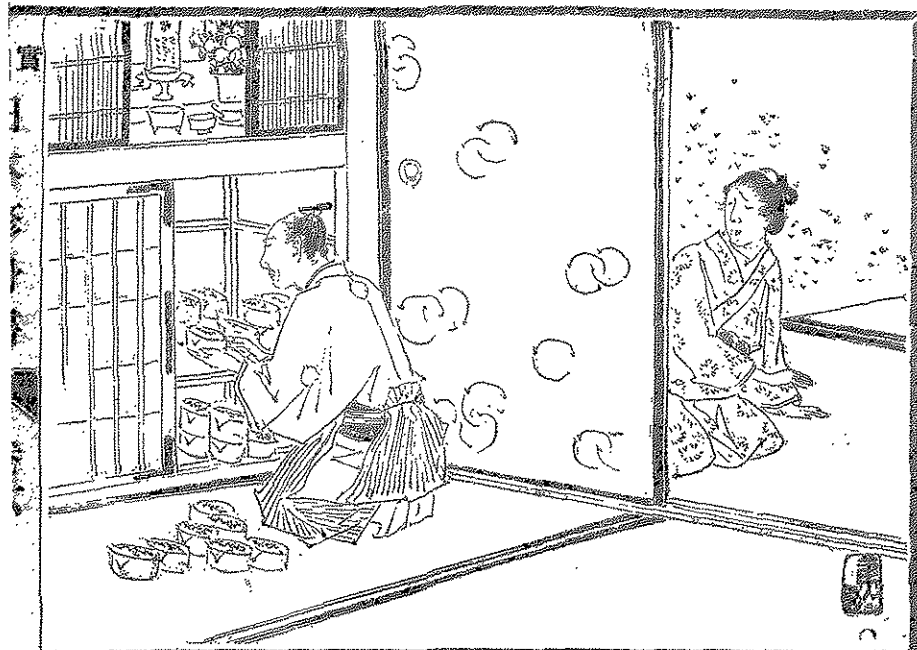
人の身に備ふべき徳の中、恭謙は最も大切なるはなし、是あれば、其の身よく修り、人に敬はれて、つひに其の身の福となり、是なければ、其の身修らず、人に賤しまれて、つひに其の身の禍となる。然るに人の、此の徳を失ふに至るを見るに、學問技藝の、いささか人にまざりたる時に始ること多し。されば、三浦梅園も、次ぎの如くにいへり、技藝は、人のたしなむべきことなり、藝すぐれたらんには、慎みも亦いよいよ重かるべし、さなきは、人の

ねたみにあふものなり、つらつら之を鑑みるに、我に甚たまされるものをば、其の失を求めてうしり、我に少くまされるものをば、ねたみ、我と相敵するものをば、吾よりれどれりとし、我よりれどれるものをば、あざける、是藝に遊ぶ人の病ひなり、と至言といふべし。又古語に、君子ハ、其ノ能クスル所ヲ以テ、人ヲ病マシメズ、人ノ能クセザル所ヲ以テ、人ヲ愧シメズ、といへり。是梅園が誠めど、其の意相通へり、二語相並べて、よく味ひ見るべし。



第八課 用心

人には、用心といふことなかるべからず、用心とは、物事の未だ起らざる前に、其の起らん時の事を預め思ひ計りて之が備へを爲すをいふ。凡う天下の事、我に預め備へあれば、何時起りたりとて、之を處置すること、至りて易けれども、備へなきに、俄に起れば、如何なる小事も、善く之を處置せんこと、甚たかたし。されば古人も、無事泰平の世なりとて、空しく光陰を送り、逸樂を事とすべからず、常に禍の起らんことを思ひ計りて、



油斷なく身を引きしめ、職をつとむべし、この義を述べて、君子は、安きに居て、危きを忘れず、といへり。

吉村又右衛門、大津に退隠しける頃、其の身は、草履を作り、妻は朝夕鍋釜をさげて、立ち働き居たり。後白河侯に、大祿にて抱

へらるるに及び、出仕の支度にとて、僅に十餘日の暇を申しうけたり。妻怪しみて、かかる僅の日數中に、いかにして諸事を整へ給ふや、と問へば、又右衛門、佛壇より小判金一萬兩を出して示したり。妻之を見て、初めより、かかる貯へありけるものを、何とて日頃賤しき暮しして、わらはを苦しめ給ひしよ、と恨みかたちければ、又右衛門打ち笑ひて、汝に此の金ありと知らせんには、争でか今日の悦びあるべき、といひたり。

君子ハ、安キニ居テ、危キヲ忘レス。

第九課 弘量

量弘くして、物に拘らざれば、憂へ少くして、心常に安けれども、量弘からざれば、物事氣にかかり易くして、憂へ常に絶ゆることなし。

弘量なるものは、人を待つこと、寛恕にして公平なる故に、よく衆人の信服を受く、之に反して狭量なるものは、人を容るること能はざる故に、動もすれば怒りを洩らして、人を罵り、之が爲めに争ひを起して、禍を速くことあり。

徳川家康三河を治めける頃、家老に酒井政親と

いふものあり、或る時神谷與九郎といふもの、途にて政親に遇ひ禮を爲したるを、政親知らずして過ぎゆきければ、大いに怒りて、是より後は、政親に遇ふ毎に必ず無禮を加へたり。家康之を聞きて、與九郎を國より逐ひ拂はんとしけるを、政親諫めて、與九郎は、膽氣ありて、賴しきものなり、大祿を以て厚く用ひ給はんとう、御家の爲めならぬ、といひければ、家康之に従ひ、厚く祿を賜ひて、且政親の言を告げたり。與九郎は之を聞きて、大いに耻ぢ入り、直ちに政親の所に至りて、前の無禮をわびたりとぞ。

第十課 公平

己れの好むものを愛し、己れの嫌ふものを憎むは、人情の常なれども、愛憎の私に流れて、人を褒貶し、賞罰を行ふは、甚だ鄙しむべき行爲なれば、深く警めずはあるべからず。事を處するには、聊私を挟まず、公平にして、かたよりたる仕方なからんことを心がくべし。然るときは、事れのづから宜しきに適ひ、義に當るが故に、人の謗りを受け怨みを來すことなくして、よく人たる道を全くするを得べし。



藤堂高虎は、朝鮮征伐の時、加藤嘉明と争ふことありて、交りを絶つこと多年なりき。或る時將軍徳川家光、高虎を會津四十萬石に封せんといひけるを、高虎固く辭して、嘉明を薦めたり。家光いふかりて、汝は、嘉明に怨みあるにあらずや、と問はれたるに、怨みは私事なり、いかで私事を以て公義をやぶるべき、と答へければ、家光いたく感賞して、遂に其の言に従ひたり。嘉明も是に感づて、後は高虎と無二の交りを爲ししとぞ。

私事ヲ以テ公事ヲ廢セズ。

#### 第十一課 勤儉

ベンジャミン・フランクリンは、北亞米利加洲、ボストン府の蠟燭屋の子なり。家貧しかりしかば、幼き時より人に事へて、印刷のわざを習ひけるが、常に務めて節儉し、其の給金を積み立てて、書物を買ひ、暇ある時には、之をよみたり。

後英吉利のロンドン府に往きて、書肆に奉公し、暇あれば、書をよみて、知識を得ることをつとめたり。二十歳の時、國にかへり、ケエメルといへるものと共に、印刷の業をひらき、又新聞紙をも發

行して、其の業をつとめけるほかに、次第に世人の信用を得、職業愈繁昌して、遂に富有の身となりたり。三十歳に及びて、ヒラデルヒア議院の書記官と爲り、明年驛遞代官にすすみたり。後公益の事業に心をかたむけ、獨立の戦争起るに及びては、其の謀に與り、特に心身を國に盡くしたり。

富ヲ致スノ道ハ、勉強ト節儉トナリ。  
今日ノ事ハ、今日ニ爲セ、決シテ明日ニ延スベカラズ。

第十二課 仁恕

天地の間、貴ぶべきものは、仁心仁愛なり、須臾も此の心を失ふべからず、是天地生生の氣なり、此の心を存するを人道とし、此の心を失ふを虎狼とす。

大岡忠固、或る日、雪見に赴きけるが、駕籠の中より、供の鎌田又六といふを呼びて、如何に又六、好き景色にあらずや、と語りけるに、又六、某もは、雪の中を歩き、寒さ耐へ難く候へば、好き景色も目にとまり申さず、と答へたり。忠固いたく其

の言に感ず、直ちに駕籠を回して立ちもせり、其の後は、絶えて雪見を爲さざりしとぞ。

人の身を思ひやりて、我がまゝなる行ひを慎むこと、忠固の如く、人の言を察して、我が身の行ひを省ること、忠固の如くならば、身修りて、仁者たるに至るべし。玉汝集にも、

無理言はず無理せぬ外はなかりけり、

かかる人をば仁者ともいふ。

とあり、之を見ても、忠固の行ひの賞すべきを知るべし。

第十三課 忍耐

忍耐とは、よく久しきに耐へて、志しを易へず、苦しきを忍びて、よく事に堪ふる力をいふなり。此の力の強きものは、即ち勇者ともいふべく、英雄とも唱ふべきものにて、古來より志しを成し業を興したるものは、此の類の人ならざるはなし。之に反して、志し厚からず、忍耐の力強からざるものは、いはゆる薄志弱行の徒なり、此の輩は、古來より志しを遂げ名を成したるものあるを聞かず。されば學を修め業を習はんとするものは、善く此の事

を辨へて、倦まず撓まず、勉強せんと心がくべし。臥雲辰致は、信濃の人なり、夙に志しを紡績機械の發明に傾け、資産を擧げて之に費し、二十餘年の間、心を苦しめ思ひを焦して、幾たびとなく、其の改良を企てけるが、遂に資金全く盡き、冬に及びても、綿衣を纏ふこと能はざるに至れり。されど聊屈せず、人の助けを得て、遂に精良なる機械を發明しければ、明治十六年、朝廷之を嘉して、良機械を發明し、人力を省き、費用を減じ、公衆の利益を興し、成績著明なり、との褒詞を添へて、藍綬褒賞を賜ひたり。

#### 第十四課 實業

實業とは、吾人に衣食住の材料を供給するわざをいふ。而して吾人の生活に缺くべからざるものは、衣食住の三つにて、之を供給するものは、農工商の實業なれば、其の重んずべきこと、言を待たずして明かなり。中にも、養蠶製茶の業の如きは、我が國の一大富源にて、外國に輸出して、利を得ること亦甚だ少からざれば、其の業に従ふものは、いよいよ勉め勵みて、家を富まし國を富ますことを謀らざるべからず。

伊藤小左衛門は、殖産の志しふかかりし人なり、曾て書を閲して、外國にて茶と生絲の需用はほきをさとり、はづめて蠶茶の業を起さんことを思ひ立ち、先づ山地一段歩ばかりを開拓し、これに茶の實をまきて培養し、其の後茶商とはかり



て、製茶十餘萬斤を賣り出し、二千六百餘圓の利を得たり。これより更に畠地を増して、さかんに茶業をいとなみけるが、後又蠶業を起さんと思ひ、先づ試に桑苗二百株を己れが園圃に植ゑ付けて、培養法を研究し、やうやく養蠶をはづめ、次第に事業を擴張して、生絲を製したれども、品質よからずして、前後二千餘圓を損失したり。されども猶屈せず、いよいよ事業をつとめければ、つひに精良なる生絲を製出して、莫大の利益を得るに至りたりとぞ。



第十五課 智能

人の才智は、生まれながらにして、同トからず、或は俊秀なるものあり、或は遅鈍なるものあり、或は俊秀にも遅鈍にも非ずして、普通なるものあり、若しよく養ひ治めて、天性に任せざれば、俊秀なるものは、愈聰明に、普通なるものは、次第に俊秀に、遅鈍なるものは、次第に普通に進みて、各其の力を逞しくするに至るべし。されば何人も、學を修め見聞を廣めて、智能を啓發することを務むべし。事を處するには、靜かに思慮を運らして、聊手れ

ちなきやうにすべし、事を處して、皆宜しきになひ、聊手れちなきは、是智の至りなり、  
徳川吉宗、或る夜、二人の幼き小姓を召し、手燭を携へずして、浴室に遣し置きたる剃刀を求めしめけるに、一人はすわりて窺ひ視んといふを、一人は、床をふみならし、其のあり所をさとりて、之をさぐり取りたり。吉宗之を聞きて、前の考へところ、却りて過ちなけれといはれしとぞ。  
人ノ事ヲ爲ス、始メテ慎ミ、終リテ慮レバ、大イナル悔イナシ。

第十六課 家を齊ふ

男は、成長して後、一家の戸主と爲り、父母に事へ、妻子を養ふべきものなれば、早くより、家を齊ふる道を學ばざるべからず。女は、成長して後、人に嫁し、舅姑夫に事へ、子女を育つべきものなれば、是亦早くより、家を治むる法を知らざるべからず。家を齊ふるには、身を修めて、行ひを正しくし、家業を勵みて、儉約を行ひ、怒りを忍びて、家人を待つをよこす。中にも身を修むることば、最も緊要なれば、決して忽にすべからず。貝原益軒も、家

道訓の初めに於いて、左の如くいへり。

人の世にある、高き卑き、皆身を修めて、家を齊ふるを以て務めとす。家の本は身にあり、故に家を治むる主人は、先づ我が身を正しくして、家を齊ふべし。君子は、常に身を慎みて、後の患へを慮る、是を以て身安くして、家保つべし。家の主人正しければ、家人を教へ導くべし、主人正しからざれば、家人の則なく、善を勧め惡を誡め難くして、家法行はれず。故に主人の身の行ひは、家人の見ならへる手本となれり、慎むべし。

第十七課 分に安んず

分に安んずとは、私慾にうちかちて、よく天命を  
楽しむをいふ。

分を知らざるものは、富みても足れりとせず、貴  
くしても止るを知らざるが故に、心忙はしくし  
て、憂へ常に絶ゆることなし。

分を知れるものは、貧しくして怨みず、賤しくし  
て嘆かざるが故に、心常に安らかにして、憂へなし。  
分に安んずれば、身常に安くして、禍を取ること  
なければ、分に安せざれば、善からざる望み起

りて、身を謬ることあるべし。されば高き卑き、皆  
其の分に安んずて、身を謬ることなからんやう  
にすべきなり。

西田宗勝は、嶋津義弘の臣なり、しばしば戦陣に臨み、  
矢石の間に立つこと三十餘度に及びたれども、曾て  
恩賜に預らざりき。或る人、之を義弘に申さんといひ  
しに、「我、戦陣に臨みて死せざるは、此の上もなき幸な  
り、争で俸祿の外に、恩賜を貪るべき」といひたりとぞ。

事足れば足るにまかせて事たらず。

たらで事足る身とう安けれ。



第十八課 公益

凡一國の盛衰は、偶然に生ずるものにあらず、必ず其の由りて来る所あるが故に、知識ひらけ、道德すすみたる國國にては、人人一己の幸福をはかると共に、公益をひろめ、世務をひらくことをつとめざるはなし。我

が國のごときも、遠きむかしより、今の世に至るまで、有爲の人物輩出して、教へをほそとし、業をはとめて、人を益し、世を利したること頗る多かりき。

野中兼山は、土佐藩の老臣なり、或は學校を興して、子弟を教育し、或はやせ地を變卜て、良田と爲し、或は藥草を栽ゑ、或は蜜蜂を養ひて、公利を興し、公益を廣めたり。其の最も人口に膾炙せるは、江戸より船一艘の蛤を齎らして、國に歸り、之を海中に投卜て、繁殖せしめたる事なり。

第十九課 忠君

皇極天皇の御代、大臣に蘇我入鹿といへるものあり、父祖の威によりて、專横のふるまひを爲ししかども、廷臣皆其の威に畏れて、匡濟の道を謀るものなかりき。時に中臣鎌足とて、忠義の心深くして、智略に富める人ありけり。入鹿の暴虐を悉にするを見て、慷慨に堪へず、竊に中大兄皇子に結びて、之を滅さんことを謀れり。是に因りて皇子、鎌足と議し、三韓の使者、朝貢を奉る時を機會として、朝廷に於いて入鹿を斬り、續いで兵を

發して、其の父蝦夷をも誅し給へり。

後數年を経て、皇子御位に即き、鎌足を内大臣に任じ、後又藤原の姓を授け給ふ。皇子は、即ち天智天皇なり。凡ろ君に事へて、忠を竭くし、國を患へて、身を忘るるは、臣民の本分なり。敢て利を求め、名を顯さんが爲めにしかするにあらず、されど功成れば、餘慶を子孫に遺し、功成らずとも、芳名を萬世に傳ふ。故に我が國の臣民たるものは、常に皇室の爲めに忠を致し、國家の爲めに益を謀ることを忘るべからず。



第二十課 兵役の義務

古語に、治に居て、亂を忘れずといへることあり、實に至言といふべし。若し一家無事に狎れて、油斷の心を起すときは、必ず火災盜難のうれへをまねくべく、一國平和を恃みて、武備をねとたるときは、内亂外寇あるに臨みて、俄に狼狽するを免れず。されば、家は、夜ととに戸をとぎして、非常をいましめ、國は恒に兵を備へて、要害をまもらしむるなれ。

兵は、國を護り民を安んずるに、缺くべからざる

が故に、我が國にては、年毎に、二十歳の男子若干人を徴集して、之に充て、常に軍事を習はしめ、三年の間、國を護るの務めに服せしむ、之を兵役の義務といふ。此の義務は、男子の代る代る負擔すべきものなれば、何人も、丁年に達したる時には、進みて其の選びに當らんことを務むべし。

汝等皆其職ヲ守リ、朕ト一心ニナリテ、力ヲ國家ノ保護ニ盡サバ、我國ノ蒼生ハ、永ク太平ノ福ヲ受ケ、我國ノ威烈ハ、大ニ世界ノ光華トモナリヌベシ。



圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 4 0 0 7 4 2 4 a

福岡教育大学蔵書